

『論究日本文学』第四〇号のこと

上田 博

K君はぼくより一回りも若い人であるが、大学院ではぼくのすぐ下で、今でもすぐ上の先輩に話すように親しくつき合っているのである。K君は酒が入ると、時に、「ぼくらが大学院の頃、寄ると、論文はどのようにしたら書けるかと相談し合っていて、そうしている間に上田さんが次々に書いていくのをうらやましく見ていた」と話して、当人は面映ゆい気持ちで聞いているのである。

修士論文は国崎望久太郎先生に見ていただき、修了した直後に先生から『論究』に書くようにと指示されて、当時『論究』の編集を担当されていた森本修先生に三〇枚ほどのものを提出した。提出した報告を国崎先生にしたら、何を書いたのかと問われたので、修士論文を縮めましたと答えたら、すぐに返してもらって来い、と言いつけられた。「論文」制作の失敗の最初であった。

『論究』第四〇号に啄木の処女作を論じた「『雲は天才である』論」を載せて頂いたのは、博士課程を修了した三年後のこと、ぼくはすでに三九歳になっていた。これを今、読み返してみると、

作品の周辺ばかりがヤケに精査してあって、小説自体への言及は骨ばかりが目立つのであるが、粗い活字も、当時は「論文」を書く仕方に少々手掛かりを感じたよう嬉しく、用もなく自分の文章を再読して悦に入っていたのである。

作品のことは全て作品の中に書いてある

一流の文芸はかくある、と実感するようになったのは、ごく最近のことである。近くに帰ってくるために、ものすごく遠い処へ出かけていたのである。『論究』第四〇号をめぐる三〇年も前の他愛ない話である。

(うえだ・ひろし 本学教授)